

三月中旬の風は、まだ少し冷たい気がした。

受験も終わり、もろもろの所用で学校に来ていた私は、職員室を出ると、ふと気になって美術室を覗くことにした。

職員室がある北校舎を出て、南校舎へ。そして階段を登って、三階に位置する美術室に向かう。

春休みに入っているので、校舎に人影は見当たらない。電灯も点かず、沈黙を保っている校舎は、まるで私の過ぎ去った時間の象徴のようだった。……いや、過去そのものなんだろう。私は確かにこの校舎で三年間を過ごしたのだから。そして、この校舎で学ぶという未来は、もう存在しない。

グラウンドで運動部が練習をしているのだろうか、遠い掛け声が聞こえる。学校によくある、喧騒。対して、私の周りでは、コツコツと私の足音だけが響いている。ほんの少し昔は私もたくさんさんの友人達に囲まれて、喧騒の中にいた。笑い声と怒った声が溢れる、あの場所に居た。

今は一人で、靴音を鳴らしている。喧騒は果てしなく遠い。その距離の遠さが、少し寂寥を感じさせる。

美術室の前に立つ。鍵はかかっているだろう、と思いつながら引き戸の取っ手に指をかけると、予想外に何の抵抗もなくするっと開いた。その瞬間、嗅ぎ慣れたオイルの匂いが鼻につく。そして、僅かな人の気配。人のいる音。

「……誰かいるの？」

私が声を掛けると、「ん？」という小さな顔色が聞こえた。

「あれ、逸果いっかじゃない、どうしたの？」

「どうしたの？ はこつちの台詞。何で絵衣子えいこがいるのよ？」

美術室には、同じ美術部に所属していた絵衣子えいこがいた。春休みは美術部の活動はないので、絵衣子えいこがいることに驚いた。そもそも私たち三年はもう活動に参加する必要はない。夏休みで三年は引退だ。まあ私以外の部員は、活動する余裕があったからちよくちよく顔を出していたみたいではあるけど。

「絵、描いてるの」

そう言った絵衣子えいこはちらりと視線を自分のキャンバスに投げる。イーゼルに掛けられたFの50号のキャンバス。絵衣子えいこは普段、20号くらいの大きさのキャンバスに描いているので、珍しく大きめのサイズの絵を描いていることになる。

「なんで今頃？ 卒業制作は終わったじゃない」

部活動に強制参加ではないにしろ、一応その年度の三月に卒業制作として、卒業する三年生の展示会を開く。私も、そして絵衣子えいこもその卒業制作に作品を出展していた。絵衣子えいこがこの時期に絵を描かなければいけない理由はないはずだった。「これはわたし個人で描いているものだから。美術部のことは関係ないよ」

「そう言う絵衣子の目つきは、力強い。美術部に関係はなくても遊びで描いている訳ではなさそうだ。もつとも、絵衣子が絵を描くことに關して、遊びで臨んでいることなんて今まで見たことはないんだけれど。」

「ふ〜ん……ところで、何を描いているの？ モチーフも何にもないじゃん」

絵衣子が向かい合っているキャンバスの向こうには、モチーフになるようなものは何も置かれていない。まだ描き始めたところなのか、キャンバスの上にはまだ色は乗っていない。下書きの段階だ。

絵衣子はいつも写実的な絵を好む傾向があるので、基本的には目の前にモチーフを置いて絵を描く。それが果物か人物か食器かはともかく、絵衣子は目の前のモチーフを如何に現実的に書くかを主題に絵画に取り組んでいる。

「モチーフなんて、必要ないよ。私はよく覚えているから」「へえ……？」

今まで絵衣子がモチーフなしで絵を描いたことなどで一度もないはず。いったい、何の心境の変化なんだろう？ 長年付き合ってきた私にも、それは分からなかった。

「でさ、逸果はなんでここに来たの？」

絵衣子の問いに私は答えず、私は窓の方に歩き出す。窓は

開けられていて、白いカーテンが風に靡いていた。風通しがいいにも関わらず、この部屋には色々な匂いが籠っている。絵の具の匂いと油の匂いが混じった、独特の匂い。私はこの匂いが好きだった。この匂いは、私の青春の匂いそのものだから。美術室に刻まみこまれた、私の青春たち。

窓の手すりにもたれ掛かるようにして、外を見た。外の色彩は、これから来る春に向けて、身支度をしているように見えた。風が真正面から私にぶつかり、冬に比べて少しだけ伸びた私の髪の毛を揺らした。耳がこそばゆい。

「……私さ」

「うん？」

背中越しの問いかけに、絵衣子はキャンバスに視線を向けたまま、答える。

「私さ、少し怖いんだ」

「怖い？ 何が？」

「未来。これからの私の、未来」

「それは、逸果が東京の大学に行くから？」

私は四月から東京の大学に通うことになっていた。もちろん、東京で一人暮らしだ。色んなことが初めての体験となる。

それはほとんどの人が、自分の人生を生きていく上で通過することだ。だけど……。